

# 〈研究ノート〉

## 電源立地のパブリック・アクセプタンス

——発電所イメージ調査結果\*——

根 本 和 泰

### 〔要旨〕

立地ということを含めた意味での発電所のさまざまなアクティビティに対する住民（必ずしも電源周辺の地元住民だけに限らない）の信頼の度合をイメージとして把握し計測した結果、次のような事実を発見した。

- (1) 発電所建設と工業開発とでは住民の評価内容にあきらかに大きな差異がある。階層特性ごとに評価点平均を求めると、A、B、Cという3つのグループが認識できる。A群は発電所建設、工業開発いずれにも好意的で、農村地域の老年層、農家出身で保守系政党支持者がこれに属する。C群はこれとあらゆる点で正反対で、発電所建設、工業開発のいずれにも非好意的で、都市地域の若年層、非農家出身で革新系政党支持者がこれに属する。そして発電所建設には反対するが工業開発には賛成するというB群は、階層特性としてはA群とC群の中間的ないし中性的な位置にある。
- (2) 人間の欲望体系において人間の生存を脅かすようなことについては、たとえ他の欲望体系が十分に充足されたとしてもそのことを拒否する。原子力発電所は確かに人間の合理性、高度性、快適性、刺激性といった欲望を十分すぎるほどに満足させてくれる。しかし安全性が保証されない限り、つまり生存性という基本的な欲望の充足が保障されない限り原子力発電所に対する反対抵抗は消滅しない。
- (3) 発電所建設に対して住民がある一定の信頼感を有しているとするれば、それは①電気は自分たちの生活に絶対に不可欠であり、②また無公害の原子力発電所の安全性が保障されるならば、それに絶大な期待を寄せたい、といった評価があるからである。また発電所建設に対して不信感を持つとすれば、それは①発電所、特に原子力発電所の安全性は全く保障されておらず、そしてなお②発電所の完全な無公害化はあり得ないと住民は判断、評価しているからである。

また発電所アクティビティに対する住民の理解イメージについては次のような事実が判明した。

- (1) 発電所に対する理解の仕方を決めるのはその人の知識と経験である。そして発電所について「良い印象」を持つのは、発電所や公害についてあまり知識や経験を持っていない者に多く、反対に「悪い印象」を持つのは、ほとんど例外なく何等かの「発電所公害」の被害経験を有し、なおかつ発電所や公害についての知識も豊富に持っている者に多い。しかし発電所の地元福祉を含めた多目的利用などプラス面については印象の良し悪しを問わず大部分の住民が全く知らない状況にあった。住民は完全に片面情報しか伝達されていない。
- (2) 「良い印象」を構成している理解イメージの内容としては、発電所アクティビティのプラス効

\* 本調査は通産省委託「新潟地域大型エネルギー基地計画調査」の一環として実施されたものであり、実査および集計は（株）東京サーベイリサーチが担当したものである。

また本稿作成にあたって実査集計担当の総責任者、渡会隆氏は、氏の執筆した2つのメモ、「地域開発と住民

意識の基本的関係」および「非論理系アイテムの処理技術についての若干の考察」を筆者が自由に利用する便宜を与えて下さった。この2つのメモに盛られてある内容はまことに啓発的なものであり、これの利用なしには本稿の作成はあり得なかった。心から感謝申し上げる。

果を指摘した動態イメージと、さらにこのプラス効果の実現を保障する前提条件ともいえる技術イメージが種類豊富に頻繁に出てくる。また「悪い印象」を構成している理解イメージの内容としては、発電所アクティビティのマイナス効果を指摘した動態イメージが最も多い点は「良い印象」の場合と同じである。しかし「悪い印象」の場合、技術イメージについては発想が非常に貧困である。すなわちプラス効果についての技術面は素人でもバラ色のイメージを抱くことができるが、マイナス効果の技術面は専門性が強く、素人には単調なイメージしか抱けないことによると考えられる。

はじめに——実査の方法

## 1. 発電所に対する信頼イメージ

### 1.1 発電所建設と工業開発との評価差

## 1.2 発電所立地に対する個別評価

### 2. 発電所に対する理解イメージ

おわりに——残された課題

## はじめに——実査の方法

電源立地がパブリック・アクセプタンス（住民の受容）を得るためには、まず個々の住民の理解と信頼を得ることからはじめなければならない。そしてこのような理解と信頼を寄せる住民をイニシアチブ層として増殖、拡大し、さらにこれらのイニシアチブ層の周囲に共感集団を育成していくことによってパブリック・アクセプタンスははじめて実現可能なものとなる。かくしてこの場合、個々の住民がある一定の理解ないし信頼を得るまでの心理的な過程を知ることが非常に重要な問題となる。

通常、ある人間がある対象に対し何らかの理解と信頼を抱くには、次のような過程を経由すると考えられる。ただしここにいう対象には、発電所という生産施設だけでなく電気という商品や電力会社という企業体も含み、これらのあらゆるアクティビティが住民の理解と信頼の対象となる。



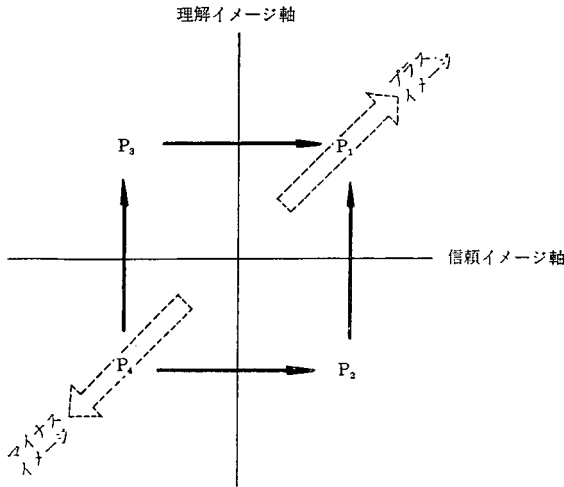
またこのような理解や信頼は何らかの尺度に

よってそれらの度合を計測することができる。ここではこれらを発電所のアクティビティに対する住民の理解イメージ、信頼イメージとして表現することにする。そしてこれらの2つのイメージから住民を図1に示すような4つのパターンに類型化する。

そしてここで求められるべきアイディアル・タイプは  $P_4$  であるが、もし今、発電所アクティビティに対する住民のイメージがマイナスからプラスへ転化する可能性があるとした場合、 $P_4$  から  $P_2$  を経て  $P_1$  に至るのか、あるいは  $P_4$  から  $P_3$  を経て  $P_1$  に至るのか、あるいは直接に  $P_4$  から  $P_1$  に至るのか、この心理的な反応の変移の経路を明らかにすることも、図1に示したような仮説（モデル）の何らかの実証的な操作によって可能である。

今回のこの小論においては、このようなモデルの操作までは検討するに至らなかった。しかしこのような住民の心理的な反応のマイナスからプラスに至る転化の可能性とかその変移のプロセスなどを明らかにするという点を目的として発電所イメージ調査を実施し、その結果もちいて発電所アクティビティに対する住民の理解や信頼の度合を計測することはできた。この過程でいくつかの重要なファクトファインディ

図 1 理解イメージと信頼イメージ



- P<sub>1</sub> : 理解を与え、信頼を寄せるイニシアチブ層
- P<sub>2</sub> : 盲目的に信頼を寄せる共感集団
- P<sub>3</sub> : 理解してはいるが、本当の信頼にまでは達していない。しかし反感は持っていない。
- P<sub>4</sub> : 理解しておらず、また不信におちいつているため反感や反発が強い。

ングをしたので、調査結果と合せてここにそれを報告する。

実査の方法

発電所アクティビティに対する住民の理解と信頼は空間的に、また時間的に大きく変わっていくと考えられる。この調査では特に空間的な変動を見るため、(1)対象電源からの影響距離、(2)対象電源のライフサイクル、(3)調査地区の都市化過程など、3つの軸を設定することにした。

調査の空間軸

調査地区	影響圏	ライフ・サイクル	都市化過程
臨海部 N市	1次 (3 km)	運転段階	都市部 (大港湾都市)
" T町	3次 (13 km)	建設段階	農村部 (寒漁村)
内陸部 M町	2次 (7 km)	発表段階	都市部 (都市近郊)
" Y村	4次 (17 km)	発表および建設段階	農村部 (平地農村)

調査4地区の世帯数、人口および成人人口は表1の通りであるが、調査の性格上成人人口を母集団とした。また実際のサンプリングソースは各地区の選

表 1 調査対均および標本数

調査地区	世帯数	人口	成人人口	標本数
N 市	6,615	20,176	14,452	300
T 町	3,009	13,808	9,681	330
M 村	1,561	8,143	5,622	330
Y 町	6,091	27,139	18,667	330

挙人名簿とし、抽出方法は単純無作為抽出法とした。

末端調査法は調査票を各個人に先に郵送し、後に調査員が面接聴取る片道郵送法を採用した。調査の実施期間および回収状況は表2のようになる。

表 2 回収状況と実施期間

調査地区	配布数	回収数	有効回収数	無効回収数	不能数	回収率
N市	330	254	242	12	76	73%
T町	330	229	222	7	101	67%
M村	330	292	283	9	38	86%
Y町	330	272	253	19	58	67%
計	1,320	1,047	1,000	47	273	76%
サンプリング	1974年1月24日~1月29日					
実査	" 2月16日~2月27日					

1. 発電所に対する信頼イメージ

まず、発電所アクティビティに対する住民の「信頼」の問題であるが、この調査では次のような2つの方法で接近をこころみている。その1つは、この問題をある一定のトレードオフ関係にあるものと仮定し、この関係の中で住民はどのような選択 (choice) を行なうのかという方法である。また他の1つは、発電所アクティビティがもたらす様々の問題をいくつかのアイテムにまとめ、それらに対する住民の評価を問

う方法である。

この2つの方法はいずれも結局、発電所のあるアクティビティに対する住民の評価を問いたすことを意味し、もしその評価内容が好意的であればその住民の信頼度は高く、また非好意的であれば信頼度は低く不信感が強いということになる。

### 1.1 発電所建設と工業開発との評価差

住民が評価、選択を行なう場合の前提として仮定されたトレードオフ関係は、次のようになる。

(A) 亜硫酸ガスや温排水などの公害の発生とか原子力発電の科学技術的な危険性を完全にゼロとするのは不可能で、多少、存在せざるを得ない。

(B) しかし電力使用量は著しく急増し、このため特に都市や産業では深刻な電力不足になっていて、発電所建設は急務である。

また住民がこのトレードオフ関係の評価、選択を行なう場合の基準尺度であるが、それは次のように構成した。ただしカッコ内は評価得点である。

- ① 積極的に発電所建設をすすめた方がよい (+2点)。
- ② 積極的に賛成はしないが、どちらかといえば発電所建設をすすめた方がよい (+1点)。
- ③ 絶対に反対というわけではないが、どちらかといえば発電所建設などしない方がよい (-1点)。
- ④ 発電所は絶対に建設すべきでない (-2点)。

さらに発電所と同じようなトレードオフ関係が考えられる工業コンビナートについても住民の評価を問い、これによって発電所建設の場合

と大規模工業開発の場合との評価内容の比較を行なってみることにする。

そこでまず基準尺度であるが、発電所建設の場合と同様に工業開発の場合も4段階とする。

- ① 積極的に工業開発をすすめた方がよい (+2点)。
- ② 積極的に賛成はしないが、時代のなりゆきで仕方がない (+1点)。
- ③ どちらかといえば工業開発はしない方がよい (-1点)。
- ④ 工業開発などは絶対にしない方がよい (-2点)。

また住民の評価、選択の前提として仮定されるトレードオフ関係も、次のように発電所建設の場合とほぼ同じような関係を設定してある。

(A) 大規模な工業開発には公害発生のおそれが多分にあり、また安全性の面もかならずしも十分に保障されているわけではない。

(B) しかし、県内に大規模な工業開発が行なわれると、県民の働き口や収入が増えることもある。

図2および図3によって、発電所建設と工業開発との住民の評価の差を見ることができる。

発電所建設に対する住民の評価は、4地区別、男女別、年齢別、農家・非農家別いずれもマイナス、すなわち非好意的なものである。

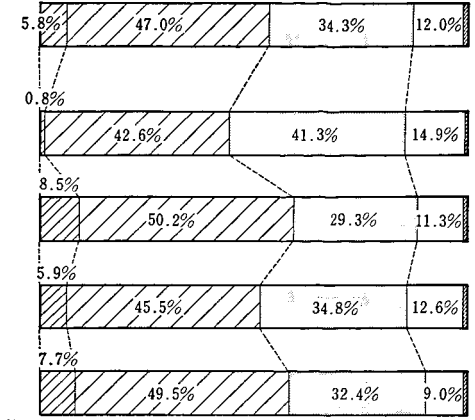
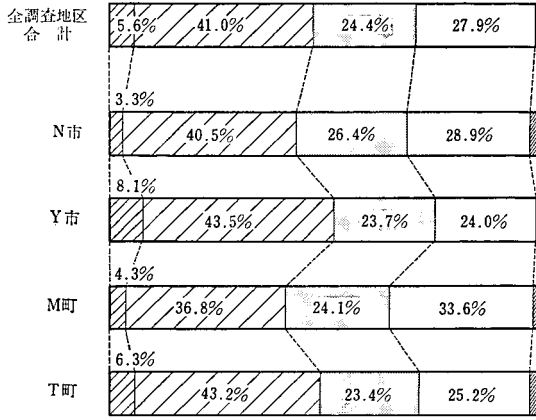
地区別には発電所の第3次、第4次影響圏にあつて、しかも農村部である場合はその非好意的評価の程度はやや低くなるが、発電所に近距離でその影響が直接的になるほど、あるいは都市化が相当に進んでいて大都市になるほど、発電所建設に対する非好意的な評価は非常に厳しくなる。

また男女別には女性(その多くは主婦)の方が非好意的評価を下すことが多く、また年齢別

図2 発電所立地に対する評価と工業コンビナート立地に対する評価

問11 現在、都市や産業では、電力が不足しています。このため発電所の建設に大きな期待がかけられます。そこで火力や原子力の発電所問題について、あなたは次の考えのうちどれをとりますか。

問10 例えば県内に大規模な工業開発が行なわれるとしたら、県民の働き口や収入が増えることもありますが、他方公害の恐れもあります。このような大規模な工業開発について、あなたは次の考えのうちどれをとりますか。



無回答  
 一、多少公害が発生したり、安全に問題があつても電力が不足しては困るので、積極的に発電所建設をすすめた方がよい。  
 二、積極的に賛成はしないが、どちらかといえば発電所建設をすすめた方がよい。  
 三、絶対に反対というわけでは無いが、どちらかといえば発電所建設をしない方がよい。  
 四、少しでも公害が発生したり、科学技術的に危険性を残して足らぬならば、たとえ電力が不足しても、そのような発電所は絶対に建設すべきではない。

発電所立地に対する評価

無回答  
 一、多少公害が発生しても、地域の発展、ひいては住民の所得（収入）の増大のため積極的に工業開発をすすめた方がよい。  
 二、積極的に賛成はしないが、時代のなりゆきで仕方がない。  
 三、絶対に反対というわけでは無いが、どちらかといえば工業開発はしない方がよい。  
 四、少しでも公害が発生するのには困るから、工業開発などは絶対にしない方がよい。

工業コンビナート立地に対する評価

図3 発電所とコンビナートの評価差

図3.1 階層別評価点平均

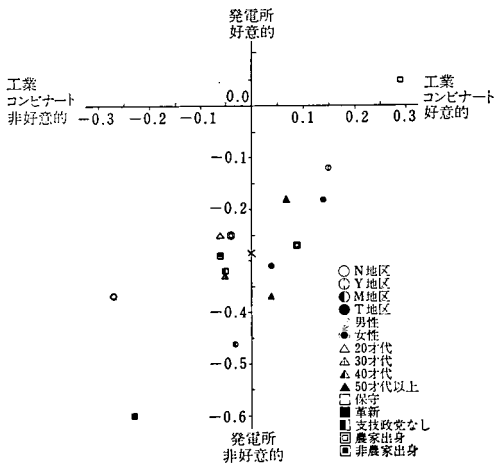
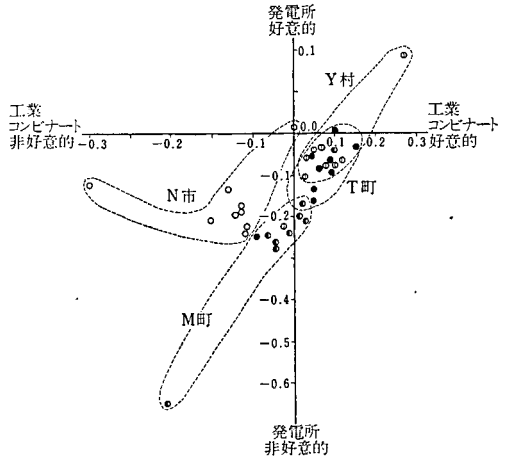


図3.2 地点別評価点平均



には 40 歳代, 30 歳代, 20 歳代, そして 50 歳代以上の順で非好意的である。さらに農家も非農家もともに同じように厳しい反応で、どちらも非好意的な評価をしている。

しかし支持政党別に発電所建設に対する評価をみると、保守(自民党支持 29.5%)は好意的な評価が 58.0% で非好意的な評価 40.7% にやや多く、また革新(社会党 19.2%, 共産党 2.8% など、革新支持は 25.6%)は、逆に非好意的の評価の方が多い。このように保守が発電所建設に好意的、革新が発電所建設に非好意的という傾向は、その地区の政治的風土によってさらに増幅される。すなわちともに内陸部にあっても、本来的に革新色の強い M 町の場合は非好意的の評価はいっそう強く、伝統的に保守色の濃い Y 村の場合は逆に好意的評価が強く出てくる。ここで「本来的に革新」とか「伝統的に保守」といっているが、それはこのような政治的風土と、いわゆる支持政党率や政党得票率とはかならずしも一致しないということを意味している。

発電所建設の場合、都市部(N市, M町)では非常に強い非好意的の評価を受け、また農村部(T町, Y村)でもその程度はやや弱くなるが、なお非好意的の評価を受ける。しかし工業開発の場合都市部では非好意的の評価であるがその程度は低く、農村部ではむしろ逆に高い好意的の評価となっている。

また男女別、年齢別、農家・非農家別には、発電所建設の場合、いずれも非好意的の評価であり、しかもその場合は男・女、若年・老年、農家・非農家を問わずいずれも同じような強さであった。ところが工業開発の場合、男は非好意的で女は好意的、若年は非好意的で老年は好意的、非農家は非好意的で農家は好意的というように正反対の評価がそれぞれについてなされて

いる。

そして支持政党別には、発電所の場合、革新は非常に非好意的の評価であるのに対して保守はあまり強くない好意的の評価となっている。ところが工業開発の場合、革新の非好意的の評価と保守の好意的の評価の強さはほぼ同程度となっている。

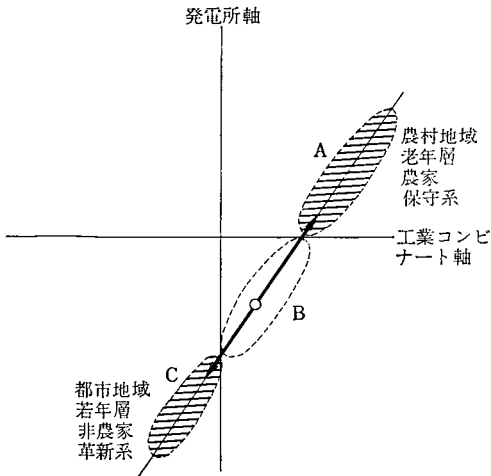
発電所建設と工業開発とでは住民の評価内容にあきらかに大きな差異がある。その理由としてまず考えられるのは、仮定されたトレードオフの関係が発電所と工業コンビナートとは次のような点で異なるという調査技術上の問題である。

アイテム カテゴリー	発電所建設への評価	大規模工業開発への 評価
A	公害の発生, 物理的危険性	公害の発生, 物理的危険性
B	電力不足への対応	地元への利益

すなわち A については同じであるが、B については一方が電力不足への対応の必要性であるのに対し他方が地元への利益であって明らかにこの点の異同が評価結果の差に影響を及ぼしていると考えられる。この問題については次節の発電所立地に対する個別評価の問題としてさらに検討されるであろう。

ところで発電所建設と工業開発との評価差には一定の法則性が認識できる。今、図 3 を単純に模式化して示すと図 4 のようになる。すなわち階層特性ごとに住民の評価点平均を求めると、図中の右上りの回帰線に沿って 3 つのグループ A, B, C ごとにそれぞれがプロットされる。A 群は発電所建設、工業開発いずれにも好意的であり、農村地域、老年層、農家出身者、保守系政党支持者という階層特性が認識される。C 群はこれとあらゆる点で正反対で、発電所建設、工業開発のいずれにも非好意的であ

図4 住民評価の転化プロセス



り、都市地域、若年層、非農家出身者、革新系政党支持者という階層特性が認識される。そしてB群は階層特性としては中間的ないし中性的であり、発電所建設には反対するが工業開発には賛成するというグループである。そしてこの場合、中間層BがAまたはCのいずれかに転化していく可能性があるのか、またもしあるとしたらそれを決定づけているものは何か、といった点が重要な問題として浮び上がってくる。

しかしこのような信頼軸の移動の方向とその深さを決める要因の発見には、発電所アクティビティの時間的な流れに沿った各段階ごとの調査が何回も実施される必要がある。従ってこの点については今後に残された重要な課題としてこの後の調査実施に期待したい。

1.2 発電所立地に対する個別評価

発電所のアクティビティに対する住民の信頼度をいくつかのアイテムに分けて測定することができる。このアイテムとしてまず考えられるのは、前節において発電所建設と工業開発との評価比較で差異をもたらしたトレードオフ関係の仮定である。すなわち、

- ① 電力の絶対的な不足に対してどのように対応すべきか
  - ② 発電所アクティビティは地元へメリットを与えるものなのかどうか
- という「電力不足への対応」と「地元への利益」の2つのアイテムである。

ところで人間の欲望体系は心理学的には「生存」「合理」「高度」「刺激」「快適」の5つの支柱からなるといわれている。そしてこのような欲望体系の充足、不充足と信頼ということは密接に関係する。たとえば発電所建設によってそれがいかに住民の合理、高度、刺激、快適といった欲望を満足させるものであっても、安全性や健康性を損うような生存欲をおびやかす不安がある限り、住民は発電所建設を拒否し不信感におちいるであろう。すなわち発電所アクティビティに対する信頼軸（信頼感または不信感）を構成するアイテムとしてこのような5つの欲望体系の支柱を考えてみようというわけである。ただし設問の設計の便宜上、生存欲は「安全」と「健康」の2つに細分し、また合理および高度は「利便」ということでまとめておいた。そこで結局、これらの5つの欲望体系の支柱にもとづいて次のような5つのアイテムを設定した。

- ① 発電所に公害ゼロはあり得るのかどうか。
- ② 発電所は周辺の自然環境と調和するといえるのかどうか。
- ③ 発電所は農業と漁業と両立し、何らかのメリットを分かちあえるのかどうか。
- ④ 発電所の建設工事による地元住民の生活への刺激をどのように評価するか。
- ⑤ 原子力発電に対し信頼と期待を抱いてよいのかどうか。

そして上のアイテムと欲望体系との関係を示すと次のようになる。

欲望体系		信頼軸のアイテム	
生存性	安全性	⑤	無公害の原子力発電
	健康性	①	公害ゼロか
合理性 高度性	利便性	③	農漁業との両立
		②	自然環境との調和
快適性 刺激性		④	生活への刺激

以上に述べた合計7個のアイテムは、発電所立地をめぐる「賛成派（企業側）」と「反対派（住民側）」との対立、抗争の主要な論点となっており、従ってこれらのアイテムについて双方の立場からの異った論理づけがなされる。各アイテムについて双方の論理を簡単な文章で表現すると表のようになる。そしてこれらの双方それぞれの論理に対して住民に次のような4段階の評価、判定を下してもらう。

- ① 全くそう思う（+2点）
- ② まあそう思う（+1点）
- ③ あまりそう思えない（-1点）
- ④ 全然そう思えない（-2点）

もし住民が「反対派」の論理に好意的判定を下し「賛成派」の論理に非好意的判定を下した場合、発電所がそこにあるということによって、結局、周辺は公害が汚染されてしまうといった<マイナス転化のイメージ>しかもたず、また逆に住民がもし「賛成派」の論理に好意的判定を下し「反対派」の論理に非好意的判定を下した場合、住民は公害ゼロを前提として周辺の計画的整備に期待するといった<プラス転化のイメージ>をも持っているとは判断できる。

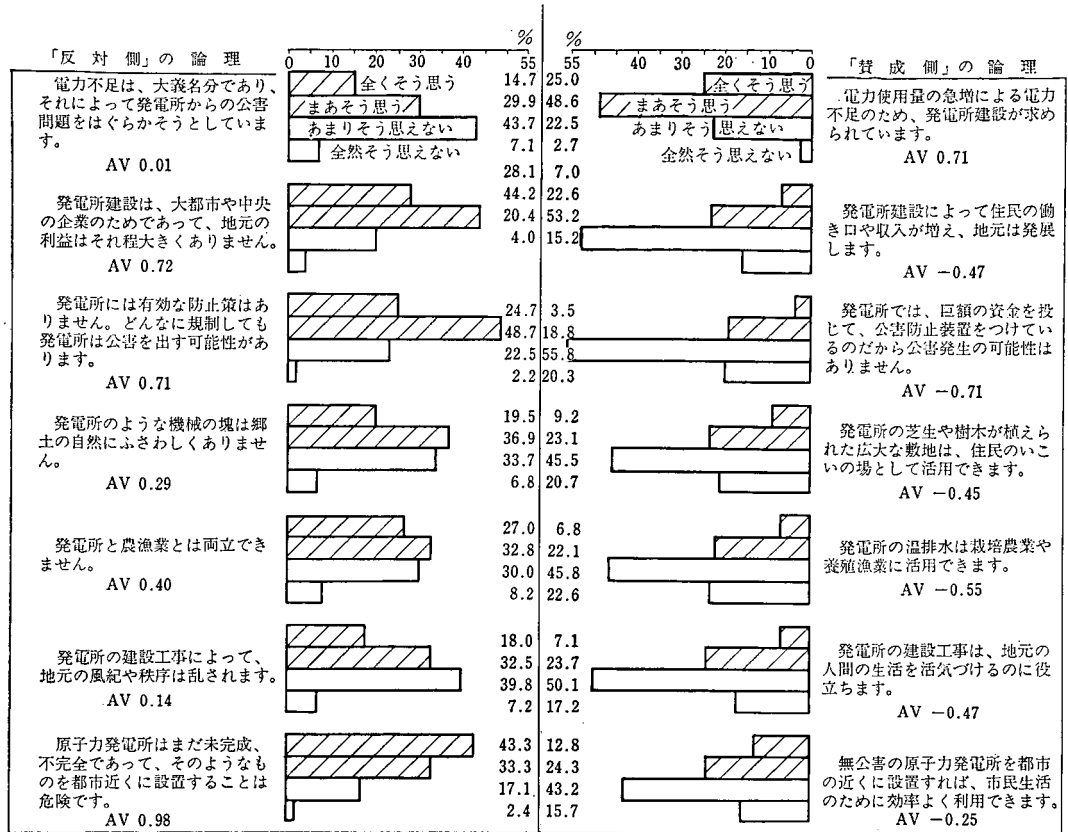
7個の項目中、「賛成派（企業側）」の論理がはっきりと肯定されているのは「電力不足への対応が必要」だけであり、他の6項目のいずれも「賛成側」の論理は否定されている。しかし「電力不足の対応」の場合、「賛成側」と「反対側」とできわだった論理の対立がなされていないため、判定ないし評価を下す住民回答者に無用な混乱が生じているようである。つまり「賛成側」の<電力不足だから発電所を建設すべきだ>という論理と「反対側」の<電力不足は問題をそらすための口実だ>という論理とは正面から対立しているとはいえない。このため「電

表3 発電所立地に対する賛否の論理

アイテム	「賛成派」の論理	「反対派」の論理
A 電力不足への対応	電力使用量の急増による電力不足のため、発電所建設が求められています。	電力不足は、大義名分であり、それによって発電所からの公害問題をはぐらかそうとしています。
B 地元の利益	発電所建設によって住民の働き口や収入が増え、地元は発展します。	発電所建設は、大都市や中央の企業のためであって、地元の利益はそれ程大きくありません。
C 公害ゼロか	発電所では、巨額の資金を投じて、公害防止装置をつけているのだから公害発生の可能性はありません。	発電所には有効な防止策はありません。どんなに規制しても発電所は公害を出す可能性があります。
D 自然環境との調和	発電所の芝生や樹木が植えられた広大な敷地は、住民のいこいの場として活用できます。	発電所のような機械の塊は郷土の自然にふさわしくありません。
E 農漁業との両立	発電所の温排水は栽培農業や養殖漁業に活用できます。	発電所と農漁業とは両立できません。
F 生活への活気	発電所の建設工事は、地元の人間の生活を活気づけるのに役立ちます。	発電所の建設工事によって、地元の風紀や秩序は乱されます。
G 無公害の原子力発電所	無公害の原子力発電所を都市の近くに建設すれば、市民生活のために効率よく利用できます。	原子力発電所はまだ未完成、不完全であって、そのようなものを都市近くに設置することは危険です。



図 5 発電所に対する個別評価



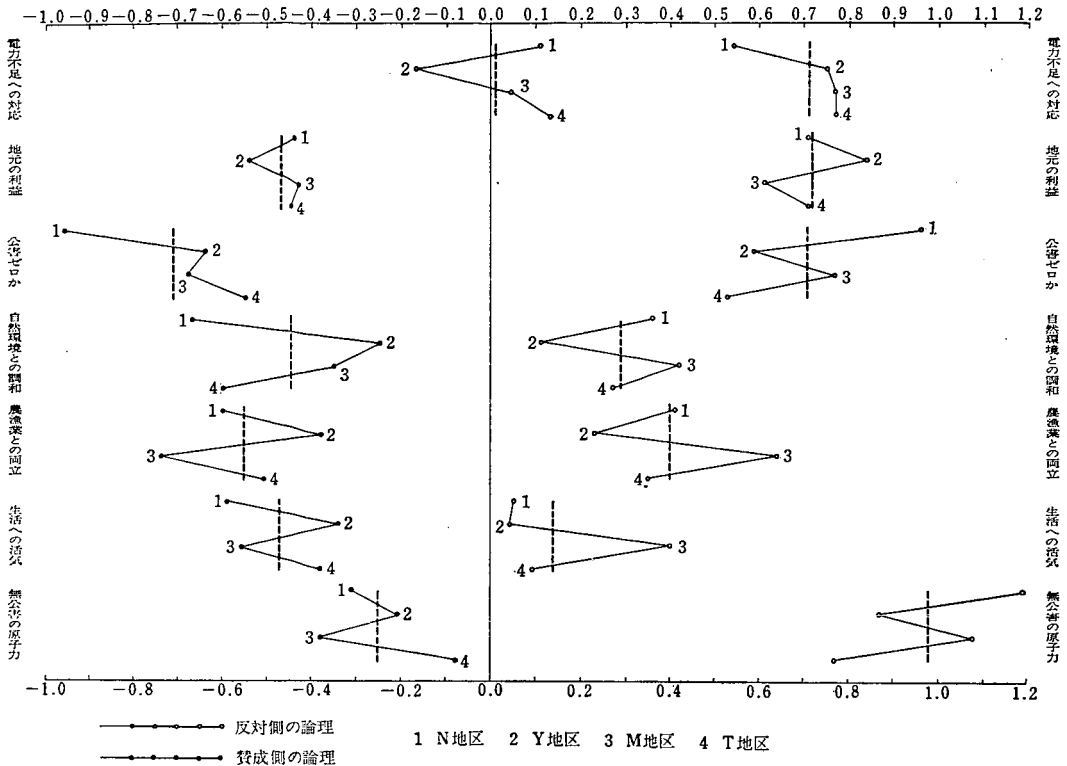
力不足への対応」という項目の「賛成側」の論理が完全に肯定されているのに「反対側」の論理は否定されずに賛否両論に分れてしまったといえよう。

また否定されても、その割合の少ない「賛成側」の論理は、「無公害の原子力発電所による効率化」という項目である。また「発電所は地元へ貢献する」とか「発電所は周囲の自然と調和する」、あるいは「建設によって地元が活気づけられる」といった「賛成側」の論理は、その否定度合がほぼ同じである。これはそれぞれの項目の「反対側」の論理に対する肯定度合がかなりバラついているのと比べて対照的である。

「電力不足は口実だ」を除く他の6項目の中で、「反対側」の論理がもっとも強く肯定されている項目は、「原子力発電の安全性は疑わしい」という主張であり、次に「反対側」論理が強く肯定されている項目は、「発電所は地元へ何の利益も与えない」とか「発電所はかならず公害を出す」といった主張である。

そこで以上のことから次の2つのことを読み取ることができる。その1つは人間の欲望体系において人間の生存を脅かすようなことについては、たとえ他の欲望体系が十分に充足されたとしてもそのことを拒否するということである。原子力発電所は確かに人間の合理性、高度性、快適性、刺激性といった欲望を十分すぎる

図 6 マイナス転化またはプラス転化のイメージ形成



ほどに満足させてくれる。しかしその安全性が疑わしい限り、すなわち生存性という欲望の充足が保証されないかぎり、原子力発電所に対しては徹底的に反対する。

他の1つは、発電所建設に対して住民が評価判定する基準ないし根拠である。すなわち発電所建設に対する住民の評価を問う設問において「発電所建設などしない方がよい」とか「発電所は絶対に建設すべきでない」という非好意的な評価の根拠として、「原子力発電所の安全性は疑わしい」とか「発電所は地元の利益にならない」、あるいは「発電所の公害ゼロはあり得ない」といった反対側の論理があげられる。また同じ設問において「積極的に」あるいは「どちらかといえば発電所建設をすすめた方がよ

い」という好意的評価の根拠となっているのは、「電力不足への対応が必要」とか「無公害の原子力発電所」による効率化といった「賛成派」の論理であろう。

## 2. 発電所に対する理解イメージ

以上、冒頭に示された仮定（図1参照）の2軸のうち片方、すなわち信頼軸に関する説明がなされた。次に問題となるのはもう一方の軸、すなわち理解軸である。

住民にとって理解の対象は企業体である場合もあれば、生産施設であったり、商品そのものである場合も想定される。しかもこのような対象の相異によって理解の内容に差が出てくると考えられる。たとえば規模、技術、動態、静



これによっても、一般に公害によって直接被害を受けたことのある場合には発電所に対しても「悪い印象」を受けることが多く、また被害経験のない場合には「良い印象」を持つことが

多い、ということが分る。

そこで次にこのような印象の良し悪しを決めている理解内容の差異について考察してみよう。すなわちどのような対象についてどのよう

表 6 発電所に対する印象のシナリオとテーマ

良 い 印 象			悪 い 印 象		
G	シ ナ リ オ	テ ー マ	B	シ ナ リ オ	テ ー マ
1	文明の恩恵、工業文明の発達、都市の発展	文 明	1	公 害。	公 害
2	生活の自動化、不自由のない生活ができる。文化的生活、生活が便利になり高度化する。	文化的生活	2	公害が心配。公害問題（がある）。	公害問題
3	電力がなくては生活ができない。産業や生活に欠くことができない。	必要不可欠	3	（発電所のため）公害が発生している。発電所は公害の発生源、公害の元凶。	公害の元凶
4	社会のため、公共のため一生懸命やっている。社会の裏方役をしている感じ。	社会的責任	4	公害になる煙を出す。悪い煙を出す。黒い煙を出す。	煙
5	公害防止に努力している。無公害の設備化に努力している。	無公害化の努力	5	高い煙突は大気汚染の元凶のようだ。住宅街にそびえ立つ醜悪な煙突。	煙 突
6	安全、無公害も前提の上で、発電所をいろいろな方法で活用することが考えられる。	多目的利用	6	時々ひどい音を出す。蒸気放出のとき大変音が大きく困る。	騒 音
7	すばらしい原動力。すべてのエネルギー源。	原 動 力	7	発電所は我々を困らせるばかりである。発電所は周囲に迷惑を及ぼす。地元のためにならない。	周囲に迷惑
8	規模が大きい。雄大で力強い。	巨 大 さ	8	敷地面積を取りすぎる。広大な土地がつぶれる。	む だ
9	大自然との調和の美しさ。発電所とまわりの景色とがよく融け合っている。	景 観	9	多くの住民に悲惨な犠牲を強いる。	犠 牲
10	発電所の中が非常にきれいで広々としている。広大な敷地に緑が沢山あり、とてもきれいな。	審 美 的	10	危険。不安。大爆発、ダム決壊、放射能漏れが起きないとは限らない。安全性に疑問。	危 険
11	計装化された設備。設備がよく手入れされ立派なのに驚く。	計 装 化	11	発電所はいかにも恐そうで近寄りがたい。恐しい。恐い。	恐 し い
12	大自然の力の大きさとそれをコントロールする人間の力の偉大さ。	力の偉大さ	12	発電所のあのバカでかさはイヤな感じ。いかにも人間性を無視している。	非 人 間的
13	地域開発。観光利用。工場誘致。	地 域 開 発	13	発電所と聞くとすぐ水俣病を思い出す。	公害病連想
14	広大な敷地を利用した住民のいこいの場。住民のレクリエーションに役立つ。	コミュニティの場	14	発電所は郷土の美しさを醜くする。	郷土の喪失
15	整備された道路が残る。地元で税金が入る。農業や漁業の近代化、発展。	地元の実利	15	自然破壊。建設工事は自然の環境を壊す。	自然破壊
16	安全で公害のない水力発電がよい。	水力見直せ	16	将来に対して破滅的な変革を及ぼす。	将来への影響



表 8 理解イメージの頻度

単位；サンプル（％）

	規模イメージ	技術イメージ	動態イメージ	静態イメージ	感性イメージ	計
良い印象	60 (15.5)	71 (18.4)	104 (26.9)	72 (18.6)	80 (20.6)	387 (100.0)
悪い印象	125 (15.1)	181 (25.6)	219 (26.7)	134 (14.4)	158 (18.2)	430 (100.0)

表 9 シナリオテーマの頻度

シナリオ・テーマ		計	良い印象	両方の印象	N市	Y村	M町	T町	シナリオ・テーマ		計	悪い印象	両方の印象	N市	Y村	M町	T町
1	文明	13	4	9	4	3	4	2	1	公害	37	21	16	11	10	9	7
2	文化的生活	15	5	10	4	6	1	4	2	公害問題	33	18	15	5	8	13	7
3	必要不可欠	33	25	8	7	12	7	7	3	公害の元凶	25	11	14	12	6	3	4
4	社会的責任	8	4	4	2	1	3	2	4	煙	13	9	4	10	2	1	—
5	無公害化の努力	1	1	—	1	—	—	—	5	煙突	5	2	3	5	—	—	—
6	多目的利用	13	8	5	4	1	6	2	6	騒音	13	5	8	9	3	1	—
7	原動力	15	8	7	3	6	4	2	7	周囲の迷惑	18	12	6	6	6	4	2
8	巨大さ	30	19	11	6	7	8	9	8	むだ	8	5	3	3	3	—	2
9	景観	18	11	7	5	5	6	2	9	住民の犠牲	10	2	8	1	4	4	1
10	審美的	12	7	5	5	2	3	2	10	危険性	40	25	15	9	10	13	8
11	計装化	20	11	9	7	3	4	6	11	恐し	12	5	7	3	5	1	3
12	力の偉大さ	18	11	7	3	5	2	8	12	非人間的	12	6	6	2	2	5	3
13	地域開発	25	4	21	5	10	4	6	13	公害病連想	3	2	1	—	3	—	—
14	コミュニティの場	15	8	7	4	5	3	3	14	郷土の喪失	9	3	6	2	5	—	2
15	地元の実利	21	5	16	4	7	6	4	15	自然破壊	23	9	14	6	5	6	6
16	水力見直せ	9	7	2	—	2	3	4	16	将来への影響	4	2	2	1	1	—	2

印象」とは若干相異なる。「良い印象」の場合、技術イメージを内容とするシナリオ・テーマの種類は豊富であるが、その頻度はそれほど高くない。頻度だけでいえば技術イメージは感性イメージや静態イメージとほぼ同じである。ところが「悪い印象」の場合、技術イメージを内容とするシナリオ・テーマの種類は少ないが、その頻度は動態イメージについて高い。さらにいえば静態イメージの頻度が最も低いことも大きな特徴であろう。

表 9 はシナリオ・テーマの頻度を示す。「良い印象」の場合、頻度の高いシナリオ・テーマとしては静態イメージの「必要不可欠」、規模・感性イメージの「巨大さ」、あるいは動態イメージの「地域開発」、「地元の实利」などがある。しかし動態イメージでない前者の 2 つのテーマは「良い印象」だけを持つという回答者に

よって支持されることが多いが、動態イメージを表わす後者の 2 つのテーマは「両方の印象」を持つという回答者によって支持されることが多い。また「悪い印象」の場合、頻度の高いシナリオ・テーマは技術イメージの「危険性」とか「公害」「公害問題」、あるいは動態イメージの「自然破壊」や「公害の元凶」などがあげられる。しかし技術イメージの 3 つのテーマはいずれも「悪い印象」だけを持つという回答者によって主張されることが多いのに、動態イメージの 2 つのテーマはいずれも「両方の印象」を持つという回答者によって主張されることが多い。結局、このことから良い悪い「両方の印象」を持つという者がその根拠として示す理解イメージは動態イメージであることが多く、また「悪い印象」を持つ場合の理解イメージは技術イメージであることが多いが「良い印

象」を持つ場合の理解イメージは必ずしもそうではない。むしろ「無公害化の努力」という技術イメージのテーマがほとんどゼロに等しい点からも明らかなように、技術イメージは「良い印象」を持つ場合の根拠とは全く考えられないといえよう。

シナリオ・テーマを地区別に見ると、まず大港湾都市で県庁所在地でもあり、大型火力発電所の周囲 3 km 圏をサンプリングしたN市の場合、「良い印象」が表明される理由ないし根拠として、電力は産業や生活に「必要不可欠」であるという静態イメージとか、あるいは発電所内の機械設備の「計装化」に対する驚きといった感性イメージなどがあげられる。また「悪い印象」が表明される理由ないし根拠としては、発電所は「公害の元凶」であり、事実「煙」や「騒音」を出すといった動態イメージとか、あるいは「公害」とか「危険性」といった技術イメージが強く出てきている。

これに対して発電所からの影響は直接には全く存在しない内陸部の米作地帯であるY村では、火力発電所を見たことが少なくむしろ発電所と聞くと水力発電所を想起することが多いためか、N市の場合と印象の良し悪しの受け取られ方は非常に違う。すなわち電力は「必要不可欠」であり、すべての活動の「原動力」となり、自分たちの遅れた生活を便利で高度な「文化的生活」へとしてくれる。そして発電所建設による「地域開発」に期待し「地元の実利」が非常に大きいということで「良い印象」を持つことが多い。また「悪い印象」を持つ場合もN市のように直接経験を通じてのものではなく、「公害」とか「危険性」といったかなり伝聞的な技術イメージによる場合が多い。

またN市のベッドタウンで実際に原発立地反

対運動の拠点になっているM町はどちらかというN市の傾向が強く、また一方、小さな漁港を抱え一般に経済的な意味でも貧しいT町の場合にはどちらかというY村の傾向に近い、といったことがひとまずいえる。しかしM町、T町共通した固有の面もみうけられる。すなわち電力の「必要不可欠」である点についての認識とか、あるいはプラントの「巨大さ」に対する感嘆などが「良い印象」を構成し、また「公害」「公害問題」「危険性」といった技術の問題が「悪い印象」を構成しているといった点がそれである。

### おわりに——残された課題

以上、いくつかの重要なファクト・ファインディングを行ってきた。これらについては冒頭の要旨において概略まとめておいたので参照願いたい。しかし紙数の関係上、いくつか論述できなかったものもある。たとえば、

(1) 住民運動に対する参加経験の有無およびこういった住民運動に対する意見、態度とその人の持つ理解イメージや信頼イメージとの関係

(2) 開発や成長よりも自然保護や環境保全を選好する住民の一般的傾向の中での発電所アクティビティに対する理解イメージや信頼イメージの形成、変化の問題、すなわち生活の諸領域における住民の選好度、満足度と理解イメージ、信頼イメージとの関係

などがそれである。これらの点については今後、機会があれば報告したいと考えている。

またはじめに仮説として論述しておいた理解軸と信頼軸との評価モデル(図1)であるが、今後、電源立地のパブリック・アクセプタンスを得るため、立地阻害要因を除去するいろいろ

な方策、手段を創出し、選定し、そして戦略化していくことを考える上で、この評価モデルは非常に有用な“しかけ”となり得る。たとえばある都市住民と農村住民の間にはおそらくこれらの評価モデルに相異がみられるはずであり、その差自体が立地の戦略重点地区を明示してくれるであろう。

しかし電源立地難の問題はこのようなハードな側面だけでなくもっとソフトな側面も重要である。たとえば住民の行動や意識を本質的に決定するのはその住民が「生活」する経済的、社

会的共同体の政治的風土とか歴史的 事実である。また広義の立地過程はこのような地域特性として検出される事実だけでなく、その地域の開発計画（政策）や自治体とか国の開発行政過程と密接に関連している。

いずれにせよ現段階においては、ハードな側面、ソフトな側面いずれについても満足な接近は全くなされていない。けだし、何もなされていないということ自体が電源立地「問題」の最大の問題であろう。

(ねもと かずやす・電力経済研究部)